

# 大学生の日本古典文学理解について考える

## ——調査報告——

岡内弘子（本姓 西山）

### 初めに

数年前、「算数ができない大学生」とマスコミに衝撃的に扱われたと記憶する。戸瀬信之・西村和雄『大学生の学力を診断する』に、大学生の数学力の低下に関する調査報告が詳しい。その後、完全学校週五日制や新しい学習指導要領の実施に伴い、昨今は、小中学生の学力低下問題が様々に取り上げられている。これに伴って、漢字の書き取りや百ます計算を推奨する本がベストセラーとして、紹介されている。

2003年6月29日付け朝日新聞は、国内620大学の学長アンケートをもとに、「学力低下 危機感強い私大 国立も44校で補習実施」という見出しを掲げている。もちろん、これに対する反論もあって、同じ調査においても、アンケートが返却されたうちの18%115人の学長は学力低下とは思わない、あまり思わないと報告されている。

筆者は、教育学を専門とする者ではなく、小・中・高生と教室において直接接し得る立場にもない。したがって、そうした学校での学力の実態を知るなどできないので、本稿において、学力がどのようなものであるかを論じようとするのではない。限られた対象を通して、大学生の古典文学理解の状況を報告したいと思う。

筆者は、日本文学（萬葉集）を専攻する者であって、教養教育において、教育・法・経済・工・農5学部の学生を対象として、授業名「人間と文化」のもと「萬葉時代の人々を知る」という講義題目で話をしている。

古典を学ぶ手順としては、小学校5・6年生で俳句や和歌に接することに始まり、中学・高校の期間に、文法を含めた教育を受けることになっている。こうした教育の到達点に位置する大学生が、基本的だと思われる古典に関して、どのような理解を示すかを調査した。現状を認識することは、「文学教育と古典教育の見直しあるいはスリム化が国語教育改革の一つの焦点となっている」（高木まさき「教育改革の中の古典教育」『日本古典文学の諸相』）といわれる古典教育を考える折りの、何らかの参考になるのではあるまいか。合わせて、教育学部である本学部においては、学生が将来教師となった場合に、何に重点を置いて生徒に対すればよいかを示唆するものではないかと考える。

### 調査方法

以下に示す内容を印刷して配布し、30分の時間を与えて記述させた後、回収する。

次の川柳を読んで、そのユーモアについて、説明してください。基礎となった、古典・故事についてふれた上で、丁寧にわかりやすく説明すること。

①おつかさん又越すのかと孟子言ひ

②芭蕉翁ほちやんといふと立ちどまり

③清盛の医者ははだかで脈をとり

(実際の用紙は縦書き)

3首の川柳は、本学の所在地である香川県高松市の、公立中学において生徒に購入させている副読本『国語便覧』（浜島書店）における「江戸時代の古典文学」の項に、「川柳」として掲げられたうちの3首であり、柄井川柳の名や説明と共に掲載されている。3首は古典や故事に基づいた川柳であり、古典に関する基本的な知識の有無を知る手がかりになると考えた。平安時代の散文や、和歌に較べると格段にやさしく、学生にも理解しやすいであろう思われた。と同時に、古典の知識をそのまま問うのではなく、高度ではないものの、応用力を判断し得る素材であると考えた。

#### 調査対象

##### (1) 対象とする学生

香川大学での平成14年度（2002）後期、教養教育「人間と文化」『萬葉時代の人々を知る』（担当西山弘子）を選択した者 115名。

この講義は、学生に配られるシラバスに「高等学校までのいわゆる『古文』の領域であることを了解の上、受講すること」と明記してある。

##### (2) 学生の内訳

教育学部	27 名	うち2年生	3名	3年生	1名
法	25		1		
経済	26		2		
工	25		4		1
農	12				
合計	115		10		2

89.6%が1年生である。10月第3週での調査である。入試センター試験後9か月を経過した時点であり、半年前までは「受験生」だった学生である。「自ら学ぶ意欲と社会の変化に主体的に対応できる能力を育成するとともに、基礎的・基本的な内容を重視し、個性を生かす教育を充実する」（1991年の教育課程審議会答申）という「新しい学力観」、「自分で課題を見つけ、自ら学び、自ら考え、主体的に判断し、行動し、よりよく問題を解決する資質や能力」（1996年7月、中央教育審議会答申）いわゆる「生きる力」を掲げた教育を受けた学生である。なお、学生の出身高校は、ほぼ全国に散らばる（香川大学『平成14年度入試関係資料』）。

##### (3) 香川大学の入試選抜方法

5学部共に、センター試験では「国語Ⅰ・国語Ⅱ」を課す。ただし、センター試験を課さな

い推薦入学の制度がある。今回の調査では、各自がどのような選抜を経て入学したかは質問していない。上記の推薦入試での合格者ばかりが集まることは考えにくいので、調査の結果には影響を与えないと考えられる。

結 果

(1) 白紙提出者 38名。115名のうち33.0%にあたる。

学部別内訳

教育	6名	選択者27名	22.2%
法	10	25	40.0%
経済	10	26	38.5%
工	11	25	44.0%
農	1	12	8.3%

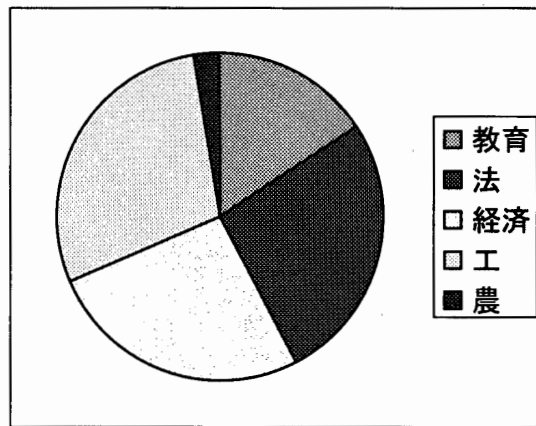


図1 白紙提出者の学部別内訳

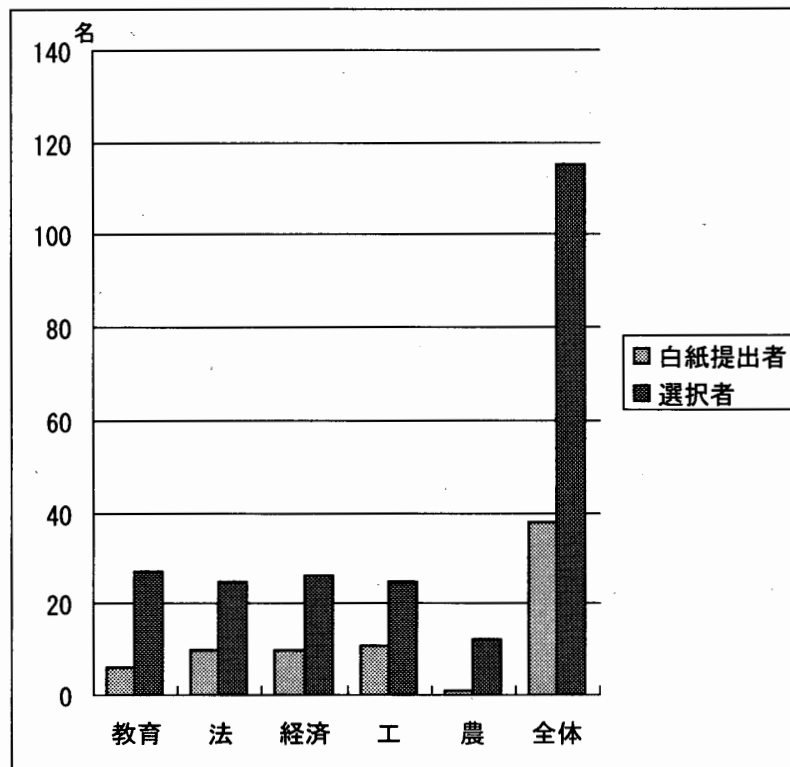


図2 白紙提出者の学部別割合

(2) 川柳に関して何か記入した者。「何か記入した」とは「芭蕉は江戸時代の人」と言う内容等も含める。したがって、正しく理解しているという意味ではない。

川柳①に関して・・・	115名のうち	44名	38.3%
②に関して・・・		77	67.0%
③に関して・・・		53	46.1%

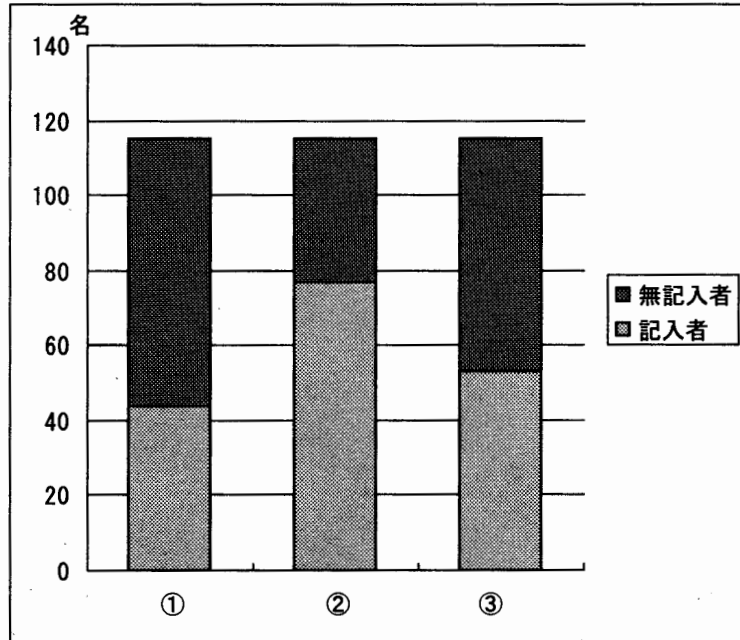


図3 記入した者

何かを記入した者は、②が一番多い。また、②について何も記入しなかった者は、①・③についても何も記入していないことがわかる。したがって、以下、この②の川柳をめぐって考察する。

(3) ぼちゃん について

ぼちゃん	54名
ぼっちゃん	20 (ぼちゃん と ぼっちゃん の掛詞とする5名を含む)
触れない・書かない	41

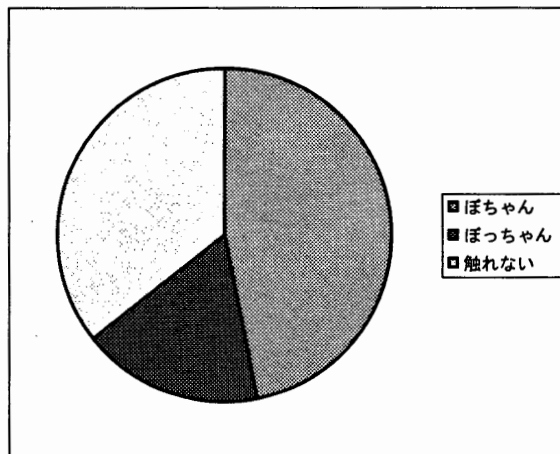


図4 「ぼちゃん」について

(4) いふ について

いふ	56名
言ふ	13
触れない・書かない	46

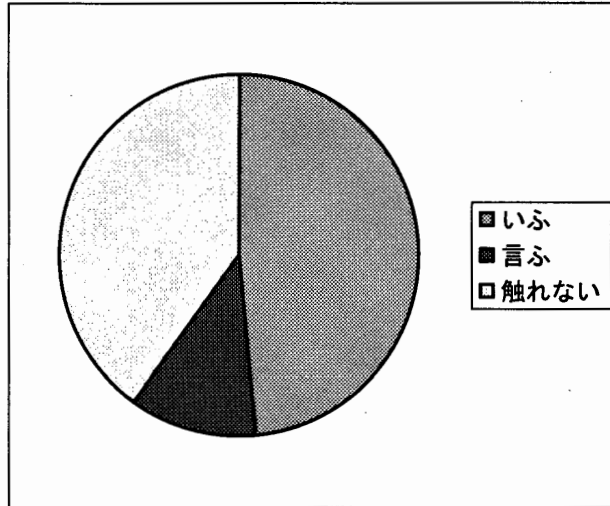


図5 「いふ」について

(5) 「古池や」を想起するか。

想起しない	68名	59.1%
正しく想起する	40	34.8%

{ かえるの句 池 しず池や はす池や	3
	1
	2
	1

を含めると 一応想起する者47名 40.9%

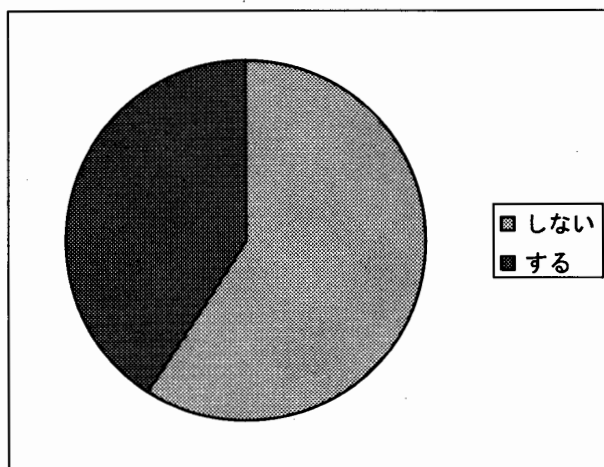


図6 「古池や」を想起するか

(6) 「ぼっちゃん」と読む 20名 は、「古池や」を想起するか。

古池や	2名	10.0%
はす池や	1	5.0%
想起しない	17	85.0%

(7) 「古池や」を想起する 47名 の、「いふ」の理解

いふ	44名
言ふ	3

(8) 内容がほぼ理解されている者（しず池・はす池・かえるを含む）  
115名のうち、 29名 25.2%

学部別内訳

教育	11名	選択者の	40.7%
法	3		12.0%
経済	6		23.1%
工	4		16.0%
農	5		41.7%

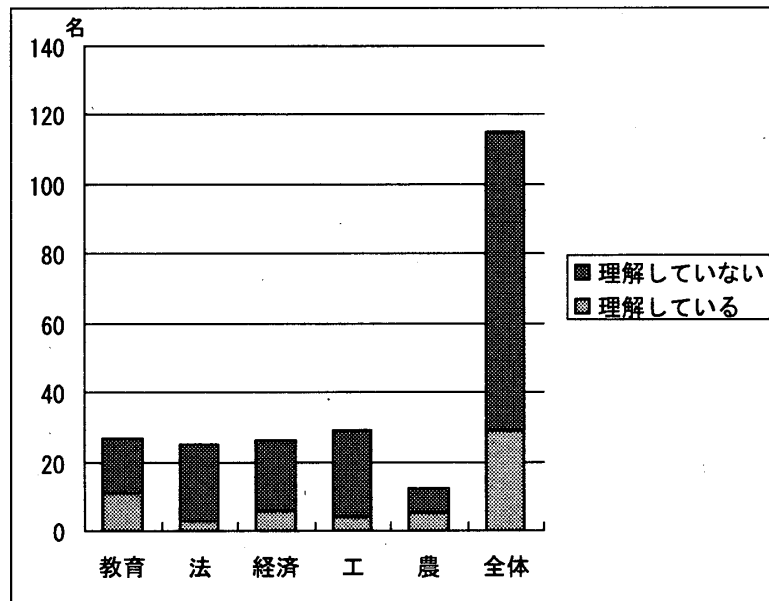


図7 内容理解者の学部別割合

(9) 川柳①・③について

- ① 孟母三遷に触れ、  
内容がほぼ理解されている者 16名 14.1%
- ③ 清盛の最期に触れ、  
内容がほぼ理解されている者 11名 9.6%

考察 1

- ① 「芭蕉」と「ぼっちゃん」から、容易に「古池や」の句が連想されると考えたが、反省された。「古池や」を想起した者は34.8%であり、少々誤りのある者を含めて40.9%である。

- ② 「芭蕉翁」までで一語。しかし、芭蕉と翁（二人は別人）、翁坊ちゃん等と解した者がある。「翁」が、男性の老人に対する敬称であることが理解されていない。今日では、新聞などでもほとんど見かけない語であるためかと推測される。

解答例

- ・蛙が古池に飛び込むのに重ねて翁も池に落ちるのではないかと思ひ芭蕉が立ちどまる。
- ・翁とは、おじいさんの意。ちゃんはお父さんの意。様々なところを歩いて旅をしている芭蕉も、子供と同じで、足が疲れて「お父ちゃん」と言って、立ちどまってしまったということ。
- ・芭蕉は俳人として有名で、世間からも尊ばれていたが、翁が「ぼっちゃん」と呼ぶと立ちどまるほど、実はまだまだ子供だったということ。
- ・各地をまわっていた芭蕉だが、ある時子供に「翁ぼちゃん」と呼ばれて立ち止まった。
- ・芭蕉は翁が自分より先に池や湖に落ちたことで助かった安ど感が表われている。

- ③ 「ぼちゃん」の表記を、「ぼっちゃん」と読んだ者が20名（「ぼちゃん」について何か記入した者 74名の内、27.0%）いる。高校までの古典の表記において、促音「つ」が、無表記のことはないので、「ぼっちゃん」を「ぼちゃん」と表記することはない。撥音「ん」の無表記と混同されたか。合わせて、「翁」とあることから、先入観で「ぼっちゃん」と思い込み、表記に注意を払わなかったことも考えられる。

解答例

- ・かえるの池に飛び込む「ぼちゃん」という水音と子供を呼ぶ時の「ぼっちゃん」をかけて芭蕉は翁なのに「ぼっちゃん」と呼ばれて立ちどまったと詠んでいるユーモアがある。
- ・翁とぼっちゃんという相反する名で呼ばれると立ちどまるというところにユーモアがある。
- ・翁ぼちゃんはたぶん翁ぼっちゃん。
- ・おぼっちゃんを翁（おじいさん）をつけて皮肉まじりに言っている。
- ・芭蕉は小さい頃「坊ちゃん」と呼ばれていて、大人になっても、何かが水に落ちる「ぼちゃん」という音を聞くと自分がよばれているような気がして立ちどまってしまう。
- ・芭蕉は、もうおじいちゃんなのに、「ぼっちゃん」と言われて立ち止まってしまう。
- ・蛙が池にとびこむ「ぼちゃん」という音で立ちどまる芭蕉と、翁なのに「坊ちゃん」とよばれて立ちどまるのがかけてある。
- ・老人である芭蕉が「ぼっちゃん」と呼ばれたと思ひ立ちどまる。
- ・翁とぼっちゃんの対比。
- ・「ぼちゃん」という音がしてそちらを見ると「ぼっちゃん」が池に落ちて立ちどまったということ。
- ・「ぼっちゃん」と他人に呼ばれて立ちどまることと、「ぼちゃん」と何かが水の中へ落ちたような音がすると立ち止まったという二つの意味になる。
- ・松尾芭蕉老人が「坊ちゃん」と呼ばれた声をきいて自分のことであるはずがないのに立ちどまった点にユーモアがある。
- ・旅人の年をくった松尾芭蕉が誰かに「坊ちゃん」と言われて自分のことと思ひ立ちどまったこと。
- ・芭蕉は昔「坊ちゃん」と呼ばれて親しまれていたために、川などに小石か何かが落ちた音に、年老いて耳が遠くなった今、カン違いを起こし、立ちどまってしまった。

- ・子供のような心を持つ芭蕉に「坊ちゃん」と呼びかけると立ち止まったと言う事。
- ・芭蕉翁が池で「ぼちゃん」と音がした事に対して立ち止まっている様子と、芭蕉翁が「ほっちゃん」と呼ばれたので立ち止まっている様子を表している。

- ④ 「ぼちゃん」を「ほっちゃん」と誤って読んだ者は、「古池や」を知らない、想起しない者が多い(85.0%)と見られる。
- ⑤ 「ほっちゃん」と誤って読んだ者は、「芭蕉」は知っていても「古池や」へと連想が繋がらないので、この句の持つユーモアには到達できない。

## 考察 2

「古池や」の句は、川柳になるほど人口に膾炙していたと考えられるが、本調査によると40.9%の者が想起するに止まっている。大学生になるまで、触れる機会がなかったのか教科書を中心に、調査をした。

### 小学校教科書

現在使用されている教科書	大阪書籍	小学国語
	学校図書	みんなと学ぶ小学校国語
	教育出版	ひろがる言葉小学国語
	東京書籍	新しい国語
	日本書籍	わたしたちの小学国語
	光村図書	国語

### 中学校教科書

現在使用されている教科書	学校図書	中学校国語
	三省堂	現代の国語
	光村図書	国語
	東京書籍	新しい国語
平成五年検定の教科書	東京書籍	新しい国語

### 高等学校教科書

尚学図書	新選 古典一	(平成6年) *検定の年を示す。
	新選 古典二	(平成7年)
	標準国語一	(平成6年)
第一学習社	国語一 古典編	(平成5年)
	国語二 古典編	(平成6年)
	高等学校古典一 古文編	(平成6年)
	高等学校古典二 古文編	(平成7年)
	高等学校新古典一	(平成6年)
	高等学校新古典二	(平成7年)
	高等学校新編国語二	(平成6年)
大修館書店	古典I	(平成6年)



大学生の日本古典文学理解について考える

	古典Ⅱ	(平成7年)
	高等学校古典Ⅰ(総合)	(平成6年)
	高等学校国語Ⅱ	(平成6年)
	新国語Ⅰ	(平成5年)
	新国語Ⅱ	(平成6年)
東京書籍	新編国語Ⅰ	(平成5年)
	新編国語Ⅱ	(平成6年)
	国語Ⅰ	(平成5年)
	国語Ⅱ	(平成6年)
	古典Ⅱ 古文編	(平成7年)
明治書院	精選新国語Ⅰ 古典編	(平成5年)
	精選新国語Ⅱ 古典編	(平成6年)
	精選古典Ⅰ 古文編	(平成6年)
	精選古典Ⅱ 古文編	(平成7年)
	高校生の国語Ⅱ	(平成6年)
右文書院	高等学校新国語Ⅰ	(平成5年)

香川県教育センター図書資料室・香川大学に所蔵されている以上の種類しか調査できなかった  
ので、調査漏れがあることは、お断りしておく。

小・中学校の教科書に俳句は取り上げられていても、「古池や」は、ない。先掲『国語便覧』  
には、取り上げられている。

高等学校で使われていた上記のどの教科書でも俳句を扱うものの、この句が取り上げられるこ  
とはない。東京書籍『古典Ⅱ』にだけ、「古池や」が扱われている。しかし、本文中ではなく、  
芭蕉の筆跡の紹介として小さく短冊の写真が掲載されるだけである。連綿体の仮名書きであるの  
で、教師が特別に扱わなければ、生徒自身が読みとめることは難しいであろう。すべてを調査する  
ことはできなかったが、高校生対象の国語便覧(たとえば大修館書店『大修館国語要覧』)や大  
学受験用参考書・問題集にも見だしにくい。

以上の調査を通して、「教科書に出てこなかったので知らない」のだと推察される。常識とし  
て知っているだろうという先入観の下で教えられないと推測されるが、この句はもはや常識では  
ないといえる。

その一方で、中・高の教科書で繰り返し取り上げられる「奥の細道」は、記憶に残っていると  
見られ、以下のように、芭蕉と「旅」に関わる記述が見られた。

解答例

- ・松尾芭蕉といえば様々なところへ歩いて旅をし、歌を詠む時には静かに立どまって詠む  
ことをふまえている。
- ・松尾芭蕉は、長旅を続けていて、何かある度に歌を詠んでいた。
- ・芭蕉が旅をしていたころ、夏目漱石も執筆活動をしていて、当時、「坊ちゃん」を発売  
していて、それに反応して立ちどまったのと、おじいさんなのに、「ぼっちゃん」とい  
われて立ち止まったのをかけている。
- ・松尾芭蕉が旅をしている時にぼちゃんという音がしたので立ちどまり、「古池や蛙とび  
こむ水の音」といううたをよんだ。

同様に、「翁」をおじいさんと説明した者も、中・高で扱われた「竹取物語」の冒頭部「今は

昔、竹取の翁といふものありけり。」などによるのではあるまいか。正確に理解されているとは言い難いが、教科書に取り上げられた古典が記憶に残っていることが心強く思われる。

考察 3

この調査の後2か月を経て、「夏は来ぬ」（第1聯～第5聯）を用いて、調査をした。

夏は来ぬ  
卯の花のにはほふ垣根に  
ほととぎす早もきなきて  
忍び音もらす  
夏は来ぬ (以下略) (実際の用紙は縦書き)

上記の歌詞を示し、すべてを平仮名で表記させ、第1聯を現代語に訳させた。この折りの講義の出席者は、68名であった。題詞「夏は来ぬ」の箇所に限って結果を示す。

(1) なつはきぬ	38名	55.9%
(2) なつはこぬ	30	44.1%

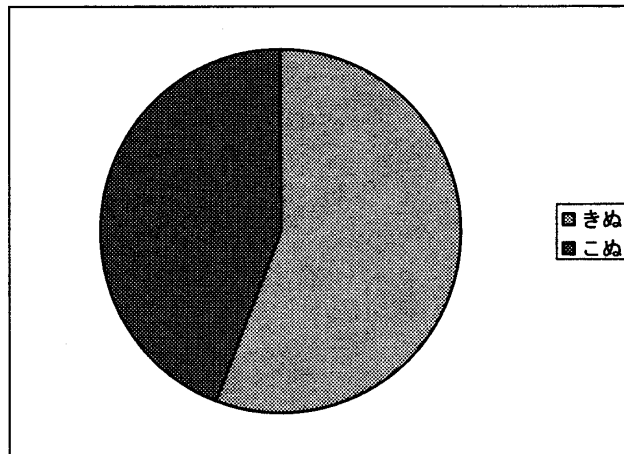


図8 「夏は来ぬ」の読みについて

(1)の「なつはきぬ」グループのうち、先回の川柳の調査にも参加していた者 33名。

そのうち、

「古池や」の句を想起する者	17名	51.5%
想起しない者	10	30.3%
白紙提出者	6	18.2%

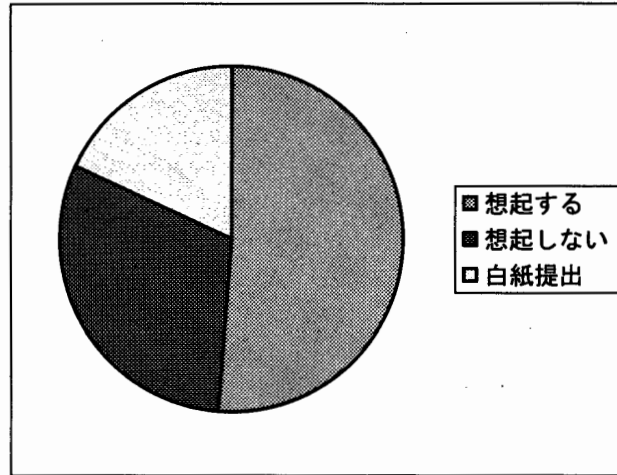


図9 なつはきぬ

(2)の「なつはこぬ」グループのうち、先回の調査にも参加していた者 26名 ((2)'と呼ぶ)。

そのうち、

「古池や」の句を想起する者	7名	26.9%
想起しない者	7	26.9%
白紙提出者	12	46.2%

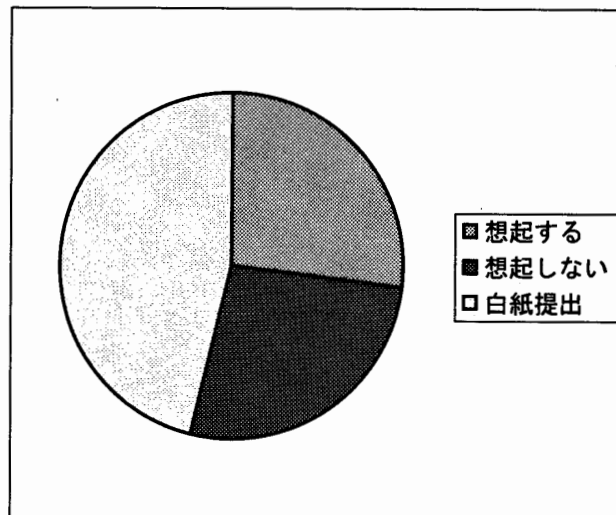


図10 なつはこぬ

(2) 「なつはこぬ」グループ 26名のうち、  
「なつはこぬ」を

「夏がきた」(誤訳)と訳した者	16名	61.6%
「夏がこない」と訳した者	9	34.6%
「夏がすぎさった」と訳した者	1	3.8%

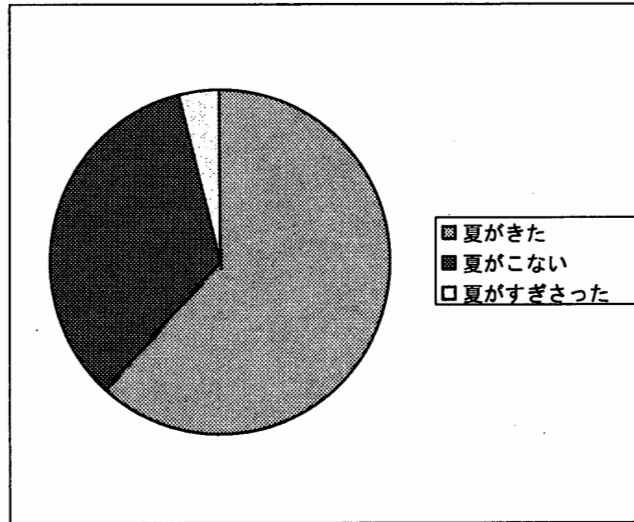


図11 「なつはこぬ」と読んだグループ

(2) 「なつはこぬ」グループ で、前回白紙提出した者12名で見ると  
「なつはこぬ」を

「夏がきた」と訳した者	7名	58.4%
「夏がこない」と訳した者	4	33.3%
「夏がすぎさった」と訳した者	1	8.3%

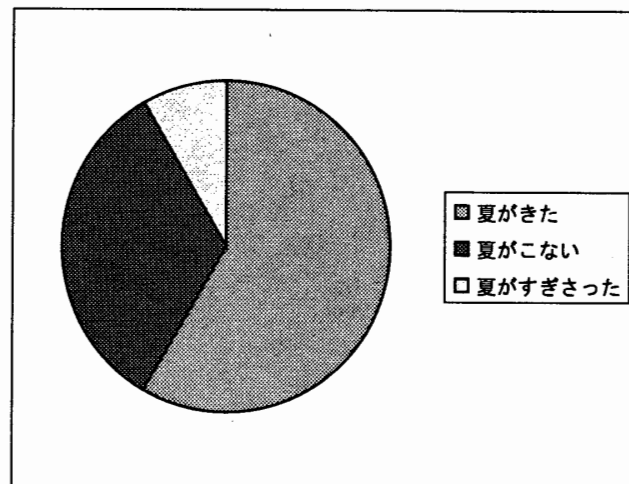


図12 「なつはこぬ」・白紙提出グループ

この調査からは、以下の点に気付かれる。

- ・「きぬ」と「こぬ」を区別することが、難しい。「夏はこぬ」を「夏がきた」の意味であるとする者が60%を超える(この調査では、助詞「は」と「が」の相違までは問題にできなかった)。
- ・「なつはきぬ」と読み得たグループは、「古池や」の句を想起する割合が高い。

- ・「なつはこぬ」と読んだグループは、前回調査の折の白紙提出者が多く、白紙提出者と「古池や」を想起しない者とを合わせると、73%を超える。
- ・「ぼちやん」が正しく読め、「古池や」を連想し得る学力は、他の古典や文語文を理解する基礎学力の有無と関連していると言える。

### 終りに

今回の調査を通して、「子どもの意欲や、興味・関心を大切にしよう」と、指導より『支援』を重視してきた『新しい学力観』のもとでの教育は、少なくとも今回の調査で見ること、基礎学力の定着という面で問題がなかったとはいえない（荻谷剛彦 志水宏吉 清水陸美 諸田裕子「『学力低下』の実態」）とされた小・中学生の場合と同じ状況が見られた。

「掛詞」という用語は知っているけれども、基本的に「同音異義語を利用した方法」（浜島書店『国語便覧』）と理解されていなかったり、芭蕉の「うた」と言うもの言いも問題がある。

さらに気にかかるのは、30分間一切何も記述しなかった38名の存在である。これは、調査人数の33.0%にあたる。「川柳」という言葉を知らなかったとしても、①・②・③の様な形式を見れば、まず俳句に似た形式だと気付くであろう。ひとまず、5・7・5と区切れば何かを思いつくと考えのだが、そこに思い至らないということなのであろうか。

以上の調査を経て、あたりまえのことであるが、文章を理解する前提として、基礎になる知識や規則の理解・定着の必要性が痛感された。（平成15年7月25日受理）